

追憶の
夜^ノ想^ク曲^タ

第一章 弁護人の策謀

1

初めて首筋にナイフを入れた時、まるでバターを切るような感触に驚いたが、それも二センチまでだつ。切つ先が骨に当たると、突いても刃先は先に進まない。

しかし、これは事前に予想されたことだ。御子柴みこしば礼司れいじは大して慌あわてる風もなく、道具を目の細かい鋸のこぎりに持ち替えた。これは一週間前にホームセンターで購入したのだが、学校の技術科で使用しているのと同様の物で小型ながら切れ味もまずまずだった。

鋸を挽く度たびに血が流れ出たが、それもチューブを搾しぼつたような出方で噴出するという形容には程遠い。きつと死後の解体だからだろう、と御子柴は解釈した。難儀なのは血よりも脂あぶらで、刃先に絡むと途端に切れなくなる。いちいち引き抜いては雑巾で拭き取り、また肉と骨を裂く。こんなことなら鋸も数本用意しておくべきだったと御子柴は少し反省する。

季節は秋に向かおうとしていた。

淡い残照と鈴虫の声。三年前に倒産し、すっかり廃屋となったこのメッキ工場跡にも晩夏の気

配が忍び込んでくる。だが、それ以外の侵入者は御子柴一人だけだった。閉鎖しても尚、メッキ工場特有の有機溶剤と鉄錆の臭いが鼻腔に入ってくる。手元から噴き上がる血肉と臓物の臭いすら掻き消してしまう。

その中で御子柴は黙々と鋸を挽き続ける。

佐原みどりの死体を解体しようとした一番の理由は何よりも運搬を容易にするためだった。さつき肩に担いで分かったことだが、こんな小さな女の子でも、死体になると予想以上に重たい。棄てるにしてもこの大きさのままでは運ぶのが大変なことを改めて思い知ったのだ。別に死体を切り刻みたかった訳ではない。もちろん最初にナイフを入れた時には快感にも似た戦慄が背筋を走ったが、やがてそれも感じなくなつた。細い首を渾身の力で絞め上げ、生命の息吹を搾り出した至高の瞬間に比べれば、所詮解体は作業の一部でしかなかつた。

三時間かけて首と四肢を切断し終えた時には、鋸と指先は血糊でぬらぬらしていた。バケツに汲んでいた水でよく洗つたが、手の表面に纏わりついた滑りはなかなか落ちてくれなかつた。

解体した死体をいったん廃工場の隅に隠して家に戻つた。もう夕飯の時間だった。戻らなければ家族から怪しまれてしまう。

家に戻ると母親と妹がバラエティ番組を見て笑い興じていた。

「あら。帰つてたの。ちよつとこれ終わるまで待つて。すぐに夕飯、チンするから」

「あーはっはっ。こいつのギャグ最っ高」

そうかよ。そんな、笑わせているのか笑われているのか分からないお笑い芸人の立ち居振る舞いが最高かよ。だから兄妹でもツボが全然違うんだな。僕もたつた今最高の気分だけど、それが

何故なのかお前らには一生かかっても理解できないだろうな——。

夕飯は冷凍食品の炒飯チヤハンだった。砂を噛むかような思いで掻き込むと、風呂に飛び込んで指先の滑りを丹念に洗い落とした。

二階の自室に閉じ籠こもって聞き耳を立てていると十時過ぎに父親が帰宅した。この男の生活習慣は学校の時間割りのように正確で変わり映えがしない。いつもの通り、食事と風呂を済ませ深夜のスポーツニュースを見終わるとそそくさと床に就ついたようだった。

午前二時を過ぎた。家人が寝静まったのを確認してから御子柴は服を着替える。窓を開けると手の届く位置に電柱がある。これを伝って下りればすぐ外に出られる。音を殺して自転車で再び廃工場に向かう。そう、自転車。この後ろの籠かごに収まるくらいに分断しないと死体を運搬できないのだ。

廃工場ではみどりがおとなしく御子柴の到着を待っていた。

その夜のうちにまず頭部を始末するつもりだった。最初は飽きるまで手元に置いておくか、さもなければもつと細かく砕いてから破棄する予定だったが、すぐに取りやめた。物珍しかった愛しい生首も今ではすっかり魅力を失い、ガラス玉のようだった眼球も白く濁り始めていた。それに何より——気味が悪かった。生前は生命力そのものだったみどりが死者になった途端とたん、得体の知れない化け物になったような気がしたのだ。白濁した瞳がじつと自分を見据えているようで何度も目蓋まぶたを強引に閉じさせようとしたが、これが死後硬直というものなのだろうか、下ろした目蓋はすぐ元に戻ってしまった。

頭部は隣町の公民館前にある郵便ポストの上に置いた。

みどりの首を晒せば、警察をはじめとして世間が騒ぎ出すのは分かりきったことだった。しかしそんな不安の一方、一刻も早く自分の所業を公に告知したい気持ちをはち切れそうになっていた。御子柴は時限爆弾をセットしたような気分ですべて郵便ポストを後にした。

果たして時限爆弾は炸裂した。

起爆剤になったのは、配達途中で生首を発見した牛乳屋の女性従業員だった。てっきりマネキンか何かだと思ひ込んでいた彼女は、その正体に気づくや否や、一区画中に響き渡るような悲鳴を上げ、やがて警察と野次馬が現場に殺到した。

御子柴自身の耳に第一報が入ったのは下校直後だった。

「相生町の女の子がとんでもない殺され方をしたんだって」

興奮気味にそう報告する母親の顔には恐怖と、そして明らかに好奇の色があった。御子柴はその顔に向かって「みどりちゃんを殺したのは僕だよ」と口走りそうになる自分を抑えるのに必死だった。

夕方、薄暗くなると御子柴はまた廃工場に向かった。まだ、ここまでは捜査の手も伸びていなかった。そして右脚を台所から失敬したバゲット・サイズのナイロン袋に収めた。生首の発見で夜の徘徊には警戒の目が光るだろうが、この時刻はまだそれほどでもない。右脚の入った袋も、お使いで買ったばかりのフランスパンにしか見えない。

夕闇迫る幼稚園は既に閉園して人影もなかった。みどりの通っていたのは別の幼稚園なので報道陣の姿もない。御子柴は辺りを見回してから袋の中身を玄関前に置いて、すぐにその場から走り去った。

二つ目の爆弾も見事に炸裂した。新聞やテレビは佐原みどり殺しをどんな政治問題よりも大きく扱った。警察は捜査人員を倍増し、各地域の各幼稚園と小学校は緊急集会を開催して登下校の保護者同伴を決定した。

御子柴は愉快でならなかった。世の中の大人どもが自分の仕掛けた爆弾にあたふたと右往左往しているのだ。

喜んでよ、みどりちゃん。僕と君との共同作業は世界から拍手喝采を浴びている——。

まだ朝靄のかかる三日目の早朝、御子柴はまたバゲット・サイズの袋に入れた左脚を神社の賽銭箱の上に置き、そのまま学校に向かった。

三つ目の爆弾は犯人に輝かしい称号を与えた。〈死体配達人〉——御子柴はこの称号をいたく気に入った。几帳面で実直そうな名前は自分にぴったりだと思った。

ただ配達を三回も行うと、さすがに近辺は警官や消防団員が四六時中警戒にあたり、おいそれと廃工場に向くのも困難になり始めた。登下校もお節介たちの目が光っており、その途中に立ち寄ることもできない。

幸い、両腕は先に回収して天井裏に隠していた。あまり嵩張らないので頭部や脚部のような面倒さはない。いったん搬出さえできれば、警戒の緩やかなスーパールの駐車場や一般家庭の玄関先に放置しておくのはさほど難しくなかった。

そして、いよいよ一番の難物である胴体をどこにどうやって配達しようかと考えあぐねている頃に彼らがやって来た。

「御子柴礼司。君を佐原みどりちゃん殺害の容疑で逮捕する」——。

その途端、御子柴はベッドから跳ね起きた。

マンションの一室、まだ窓の外は暗いままだ。空調のタイマーはとうに切れて室温が下がっているはずなのに、額にはべっとり不快な汗が纏わりついている。手の平で拭ってみたが、不快感も少しも減じない。枕元に置いた携帯電話を開いて時刻を確かめるとデジタル表示は04:24を示していた。

ふん、と御子柴は鼻を鳴らす。別段この時間に目覚めたところで体調に影響が出る訳ではないが、悪夢に安眠を妨げられたことが癢に障った。佐原みどりを殺した記憶はまだ鮮明に残っている。首筋にナイフを入れた感触も手の中に残っている。それをわざわざ夢で追体験する必要などなかった。

ベッドから下りて立ち上がると、左の脇腹にちくりと痛みが走った。反射的に患部を押さえるが傷口が開いた訳ではない。抜糸をしてからはや二カ月が経過している。手術直後は悶絶するような痛みだったが、今は蚊に刺された程度にしか感じなくなっていた。

折角、早くに目覚めたのだから時間を有効に使うべきだ。御子柴はいったん部屋を出、集合ポストから朝刊を引き抜いて戻って来た。御子柴の新聞の読み方は経済面と社会面が中心になる。経済界での相克、社会に巻き起こる悲劇はいつでも弁護士の本のタネだ。

現在、御子柴法律事務所は企業三社と顧問契約を結んでいる。この顧問料だけで事務所の家賃は賄えるが、もちろんそれで充分ということはない。昨今の経済状況を考えれば三社の顧問契約が永続する保証はどこにもなく、新規開拓は当然の業務となる。その場合、御子柴の選択する条

件は依頼人の懐具合と置かれた立場に拠る。一番理想的な依頼者は後ろ暗い資産家だ。後ろ暗い人間ほど名声を尊び地位にしがみつく。これは個人も組織も変わりはなく、出自の怪しい組織団体がそれを隠したいがために催事を派手にするのと同じ理屈だ。そして、そういう人間や組織は己の保身のためならいくらでもカネを出す。

社会面のトップは先日行われた夫殺しの判決公判に関する記事だった。

（十六日、津田伸吾さんの殺害事件について裁判員裁判の判決公判が東京地裁で開かれた。被害者の妻である津田亜季子被告（三五）に地裁が下した判決は懲役十六年。亜季子被告は当初から殺害事実を認めており、裁判はその量刑に注目が集まっていた。大塚俊彦裁判長は判決理由を、夫の生活能力が乏しいことに加え他の男性と再婚しなかったことを理由にした身勝手きわまりない犯行と断じ検察側の主張をほぼ受け入れた。被告の代理人宝来兼人弁護士は量刑不当として即日控訴の手続きを行った。亜季子被告は今年五月五日に痴情のもつれから夫の伸吾さんを殺害した容疑で逮捕され東京拘留所に収監されていた）

他に関心を惹くような記事は見当たらない。御子柴は新聞を畳むと、調査中の事案に目を通し始めた。

今回の事案は全てが自分の手になるものではない。退院したのが今月の半ば、それまでは事務員の目下部洋子に調査を指示していたので、子細な部分で詰めが甘いところもある。だが致命的というほどのものではないので後追い調査までする必要はなさそうだった。

入手した資料に誤謬はないか。それは外部に対しては苛烈で、仲間内には寛大な弁護士会の面々を沈黙させるに充分なものなのかどうか——御子柴は内容を吟味した上で大丈夫だと判断した。

「熱いシャワーを浴びてから七時にマンションを出る。いつもより二時間ほど早いが構わない。途中で馴染みのコーヒー・シヨップに立ち寄り、パン二切れと砂糖の入ったブレンドを一杯。病み上がりの身体でも、このくらいなら許容範囲だろう。」

虎ノ門の事務所に到着したのは八時少し前だった。まだ洋子は出勤していない。御子柴は自分のデスクで資料を揃え始める。

やがて事務所のドアを開けて洋子が入って来たが、御子柴の姿を見るなり非難するような声を上げた。

「先生！ どうしてこんな時間に」

「たったの二時間早いだけだ」

「でも、一昨日退院したばかりだっていうのに……お医者さんもまだ本調子じゃないから一週間は休養するようにと仰って」

「休んでいる間の収入を医者が補償してくれる訳じゃない」

御子柴は煩そうに手を振って洋子の言葉を遮る。法律事務所の事務員として有能なのはいいが、御子柴自身の体調や生活にまで口を出してくるのは有り難迷惑でしかなかった。

「依頼していた案件の調査、ご苦労だった」

仕事の話に戻ると、洋子の表情は目に見えて緊張した。

「ただし、聴取の際に解約件数も確認しておけば完璧だったな。このテの案件は案外解約された事案の中に本質が隠れているものだ」

「あの……その調査結果を何に使うつもりなんですか」

「うん？」

「弁護士会で懲戒請求を出すんですか。それとも刑事告発をを考えていらっしやるんですか」

いつになく詰問口調だったので洋子の顔色を窺うと、その目がわずかに非難の色を帯びている。普段は懲戒される側からの意趣返しなのか、それとも気紛れな正義感の発露なのか——そう質しているような目だった。

「懲戒請求も刑事告発も今のところ考えていない。どちらにせよ、カネにはならないからな。とりあえずは交渉カードの一枚だ」

「交渉カード？」

「他人が気にも留めないことでも、本人が人に知られたくないこと言われたくないことは交渉の材料になる。使い方次第で釘一本が殺傷能力充分の凶器にもなり得る」

「……凶器に使う可能性もあるんですか」

脅迫に使うつもりか、と訊かなかつたのは洋子本来の慎重深さと思えた。

「今のは言葉の綾だ。気にするな」

しかし気にするなど言っても、この事務員には無理な話だろう。その証拠に非難めいた色が一段と濃くなっている。

「また、何か危険な仕事をするおつもりですか。だったらやめてください。ここは先生の個人事務所です。パートナーもいなければイソベ……アソシエイトもいません。もしもまたあんなことが先生の身に降りかかたら、事務所が立ち行かなくなります」

「それでも三カ月は持ち堪えただろう」

「期間のことを言ってるんじゃないやありません」

「揉め事の渦中にいる一方を助ければ、別の立場の人間から恨まれるのは当然だ」

洋子はまだ納得していない様子だった。以前であつたら事務員に何を思われたところで歯牙にもかけなかつたが、今回は三ヶ月間に亘つて事務所を留守にしたという弱みがある。

「弁護士なんて憎まれて何ぼの商売だ。大体儲かる商売というのは大抵憎まれるものさ。それに、儲からなければ事務員の給料も払えん」

御子柴なりに情理を尽くして説明したつもりだったが、洋子は尚も睨んでゐる。刺されるほど憎まれては元も子もないところか。

病院で起き上がれるようになってから新聞報道を確認すると、弁護士が相手側の遺族に襲われた事実から先に踏み込んだ記事は一つもなかつた。事件を担当したあの老獪な刑事が気を利かせて伏せてくれたのか、御子柴が過去に起こした事件については公にされなかつたようだ。従つて洋子の耳にもその事実は伝わっていないはずだが、もしもそれを告げたら、この事務員はいったいどんな顔をするだろうか。

しばらく黙っていると、やがて抗弁を諦めたように洋子は軽い溜息を吐いた。

「昨日帰られた後、谷崎先生から電話をいただきました」

「谷崎先生から？」

「退院したなら一度会いたいと伝言を承りました」

恩を売るのも売られるのも性に合わなかつたが、相手が谷崎ともなれば話は別だ。前回の事件を引き継いでくれた件もあり、何より御子柴に対する懲戒請求をことごとく収めてくれた経緯が

ある。いったい自分の何が気に入ったのかは知らないが、やはり退院後に礼の一つはしておくべきだ。少なくとも東京弁護士会の前会長を敵に回していい理屈はない。

「今日、何か予定はあったかな」

「ありません」

それなら余計に都合だ。今回の案件で出掛ける途中に谷崎の事務所がある。

「ちょうどいい。今から伺うからと先方にアポ取っておいてくれ」

谷崎の事務所は同じ港区の赤坂にあった。瀟洒な高層ビルの建ち並ぶ中、今ではあまり見かけなくなった低層ビルの二階が彼の根城だった。

外壁のくすんだ色だけで建築年数の古さが分かるが、その佇まいは老朽化というよりは古色蒼然という形容が正しい。中に入るとその印象は一層強くなり、まるで由緒正しい明治建築の中に迷い込んだような錯覚すらする。

昨今、羽振りのいい弁護士たちの流行りは事務所移転だ。辺鄙な場所から華やかな場所へ、中古ビルから新築ビルへ、そしてマンションの一室から高層ビルの一フロア貸し切りへと例外なくステップ・アップを誇示する。事務所の器で仕事をする訳でもないのに、よほど外観が大事と見える。もつとも御子柴自身が見映えの良さからベンツを乗り回しているのだから偉そうなことは言えない。

その点、谷崎はここに事務所を構えて以来、現在に至っている。ビルと同様に本人も齢を重ねたが、古さが不安よりも安心感を醸成しているところは人徳というべきだろう。

受付で来訪の意を告げるとすぐ応接室に通された。さすがに応接セットはアンティークとまではいかず、落ち着いた色合いだが真新しいソファだった。

「やあ、御子柴先生。しばらくくだったね」

現れた谷崎はいつものようにびつしりと銀髪を撫でつけ、温和な表情で御子柴を迎えた。瞳は吸い込まれそうなほど深く、常に叡智を感じさせる光を湛えている。

だが、この外面に騙されてはいけない。紳士然と振る舞っているが、かつて東京弁護士会では革新派の急先鋒として名を上げた男だ。他所から洩れてくる以前の武勇伝を聞く限りでは、決して温和でも紳士でもない。対立する者は年上であろうが学閥の先輩であろうが、問答無用で潰しにかかったらしい。そこでついた渾名は〈鬼崎〉だ。

谷崎完吾、八十歳。前東京弁護士会会長、弁護士番号10000番台。東京弁護士会で最大派閥を誇る自由会の領袖であり、それゆえに会長を辞した現在においても未だ隠然たる発言力を保持している。

現状どこの弁護士会も同様だが、登録順になっている弁護士番号が10000番台の人間は高齢化でめつきり数が少なくなつた。言い換えれば上席の寡占状態であり、各県の弁護士会の頂点にはまず彼らが君臨している。本来、弁護士は一人一人が独立した身分なので上下関係はないのが建前なのだが、権威の存在するところには例外なくヒエラルキーも存在する。さしずめ谷崎はその生きた見本のようなものだった。

「もう、怪我の方はいいのかね」

「お蔭様で……先日の事件では先生にご迷惑をおかけしました」

「礼には及ばんよ。あそこまで筋ができ上がっていれば誰が弁護人になっても結果は一緒だ。檢察側と裁判長までが同じ意見の裁判など高裁以上では樁事ちんじではないかな。被告人は終始文句ばかり垂れておつたが、懲役十五年は妥当な量刑だろう。ああ、そうそう。眞鍋裁判長は大学の後輩でね。あの後、久しぶりに旨い酒が呑めた。これは却かえって君に感謝すべきかな」

それは初耳だった。

「眞鍋くんが君のことを称賛しておつたよ。今日びの弁護士には珍しく外連味けんれんみのある論理展開をするとな。いや、これは皮肉でも何でもない。裁判員裁判が日常となった今、演出効果というのはいくらも無視できない要素になった。できれば、派生した別の事案でも君の弁論を聞きたかつたらしいが」

御子柴の依頼人が懲役刑を申し渡されたのはベッドの上で知らされた。それに付随したもう一つの事件は現在も係争中だが、そちらの案件は被告人と意思の疎通が円滑でないため、弁護人はひどく苦勞しているとのことだった。

「先生にはもう一つお礼を言わなければなりません。今回も弁護士会での懲戒請求を収めていただいたようですね」

「ああ、あれか。あれも別に礼には及ばん。例の破廉恥はれんちな男が、ここぞとばかり紙のように薄っぺらい倫理観りんりかんなぞを振り翳かきしたからな。いつもは自身が倫理規程の境界線を行ったり来たりしておるのに、他人が踏み越えたとなると鬼の首を取ったかのように舞い踊る。傍はたで見ていても愉快だから即刻潰してやったよ」

そう言つて谷崎はからからと笑う。自分の意に添わぬ者、自身の信条に外れる者を容赦なく叩

くところは往年の〈鬼崎〉を彷彿させた。

「綱紀委員会の席上であの男は、言うに事欠いて君のことを犯罪者と罵りおった。弁護士資格を剝奪するに足る重大な犯行要件であるとな。確かに一般常識において誉められた行為ではないが、弁護人という立場からすれば全否定できるケースではない。あれを一種の虚偽と考えれば同情する同業者もいよう」

あれ、とは自分の犯した死体遺棄のことを指しているのだ。御子柴は沈黙するより他ない。

「世間広しといえども虚偽を容認する常識はない。しかし、この世には三つだけ嘘を吐いても良いとされる職業がある。日銀総裁と物書きと、そして弁護士だ。弁護士は依頼人の利益を護るためなら知っていることでも知らないと言える。いや、言わなくてはいかん。何となれば弁護人たるもの世界中を敵に回してでも依頼人を守り抜く使命があるからだ。あの破廉恥はそれを全く理解しておらん」

「その趣旨を委員会で仰ったのですか」

「うむ。あの男が請求を提出した時はいくぶん同調する空気もあつたが、元より人品卑しい男の戯言だ。わしに反論してでも手を挙げようなどという者はいなかつたな」

「先生は警察方面にもわたしの弁護をされたと聞きました」

御子柴はそう切り出した。先の事件の顛末について新聞報道で触れられていない点は洋子を通じて聞き知つたのだが、御子柴の犯した犯罪について所轄が色めき立った際も、谷崎が先手を打つてくれたというのだ。

「ああ、検察庁に乗り込んだ件のことを言っておるのかね。あれとて大したことではないし骨を

折った内にも入らん。旧知の検事を訪ねて、立件するに足るだけの物的証拠があるのかと訊いただけさ」

そうだ。この老獪な弁護士は担当の検事正を前に、たとえ御子柴を死体遺棄で起訴しようとしても物的証拠は何一つとして存在していないことを念押ししたのだ。

「その検事も道理の分かった男でな。君を死体遺棄罪で起訴することの危うさはわしごときが説明するまでもなかった。話は三分でケリがついた。後は共通の知り合いについて悪口雑言あっこうざつごんを垂れるだけの愉快な時間だったよ」

つまり、こういう経緯だ。

先の事件で、御子柴は被告人が殺害した被害者の遺体を現場から移動させた。もちろんその時点では被告人が犯人とは知らず、死体を移動させたのも揉め事に巻き込まれなかったからだっ

た。ところがこの人物が容疑者になるや否や、所轄署の刑事が御子柴の死体遺棄を疑い出した。当時、容疑者の置かれていた状況では御子柴以外に死体を移動できる者がいなかったからだ。元より警察関係者に評判のよくなかった御子柴だったので、捜査本部は死体遺棄事件としても立件したい意向だったようだ。

だが先述した通り、御子柴の身辺からは何の物的証拠も挙がらなかった。何より現場の一部始終を目撃していたはずの被告人が罪状については全面否認で争う意思を表明しており、結果的に御子柴の加担も否定していたのだ。

また仮に被告人が罪状を認めたとしても、それで御子柴の死体遺棄が立証できる訳ではない。

御子柴自身もそれを見越していたが、もっとも思い出したのは意識が回復した後であり、先の公判が終わった時点では考えつきもしなかった。

「まあ、検察にしてみれば被告人の主張を引つ繰り返すのに精一杯で、君の方まで手が回らんとするのが実情だろう」

こうして御子柴の行為は未だ起訴されずにいる。

「人の口に戸は立てられんから弁護士会に噂が走るのも早かったが、これを以て弁護士資格剥奪というのなら、君以前に弁護士会から追放される輩は山ほどいる。請求に対して挙手を躊躇った会員たちの本音は恐らくその辺りだろう」

「いえ、それは違いますね」

「うん？ 何が違う」

「谷崎先生を敵に回そうなんて気骨のある人間は、あの中にいません」

谷崎は再び大笑いした。

「それは買い被りというものだ。老人斑で顔半分が黒くなったような老いぼれを誰が怖がるものか」

「お言葉ですが、過ぎた謙遜は嫌味に聞こえますよ」

そう忠告すると、谷崎は愉快そうに御子柴を見た。

「では正直に、しかも正確に言つてやろう。東京弁護士会でわしを敵に回しても構わんなどと考える気骨の持ち主は御子柴先生、君だけだ」

「それこそ買い被りですね。わたしは別に反骨精神を持っている訳じゃありません。日頃の行い

から弁護士会という組織に馴染めないだけです。不良学生がホームルームに出席したからないのと一緒ですな」

「ホームルームか。言い得て妙だな。その通りだ。東京に限らんが弁護士会はいい齡をした大人たちのホームルームと化した。誰も彼も本音を言わん。建前と理想論さえ口にすれば免罪符になると思っている。賢しらに自由と正義などとほざいておるが、結局は権力や権益が大好きで、自己保身のためなら依頼人の利益など知ったことではない」

谷崎はそう吐き捨ててから口調を変えた。

「今しがた不良学生と言ったな。不良か。いい響きだ。実は御子柴先生。話というのは他でもない。同じ不良ならわしとつるむつもりはないか」

「……仰る意味がよく分かりませんが」

「わしも若い時分は不良弁護士と呼ばれたから気は合うはずだ。単刀直入に言おう。次の会長選挙では君が自由会から出馬しろ」

「それは以前にもお断りしたはずですが」

「今回はわしも些か本気だな。あんなホームルームのような組織は放っておけばどんどん腐敗していく。一度根底から覆さん限り再生できん。そして、ぶっ壊せるのは君のような不良だけなのだ」

谷崎は御子柴をじつと見据えた。泰然としているが奥底に熱を帯びた目だった。

「お訊きしますが……どうして先生は、それほどわたしに肩入れしてくれるのですか」

「ふむ。きつと色んな意味で型破りだからだろうな。現状を打破するのはいつだって既成の物差

しから外れた者だ」

「打破するどころか、とんでもなく危険な爆弾かも知れない」

「それならそれで結構だ。あんな寄り合い所帯、腐り続けるより破壊された方がまだマシだからな」

よほど弁護士会に嫌気が差しているか、御子柴を孤高のアウトローでも評価しているのだろう。もし自分が本当の意味でアウトローであることを知ったら、いくら清濁併せ呑む谷崎でもこうは言うまい。

だが自分の出自を敢えて明らかにする必要はない。ここは前回同様にのらりくらりと逃げるのが得策だ。

「しばらく考えさせていただけますか」

「もちろん。会長選挙は来年四月だ。時間はたっぷりある」

「あまり期待はしないでください……それでは」

辞去を告げ、応接室を出ようとしたところで「待ちなさい」と、声が掛かった。

振り返ると、谷崎は座ったままこちらを凝視していた。

「誤解があるといけないから言っておくが、わしは君を単なる跳ね返りだとは思っておらんし清廉潔白だとも思っておらん。何故なら君が少年時代に何をしたか承知しているからだ」

一瞬、息が止まった。

「はあ。買い被りの前に見損なっていたか。わしが碌に調べもせずに、どこの馬の骨とも知れん男を神輿に担ぐと思うかね。安心し給え。他の誰に口外するものではない」

「……ますます分からなくなりました。わたしの過去を知らながら、どうしてご自身の駒にしたがるんです？」

「逆だな。過去を知ったからこそ手元に置いておきたくなった」

谷崎は最後にもう一度笑ってみせた。

「君のような人間に非常な興味を覚える」

2

御子柴が次に訪れたのは南青山の一等地に建つオフィスビルだった。

地上十七階、全面総ガラス張りの近未来建築。訪問地はこの十四階から十六階までを占めている。

十四階オフィスのドアには仰々しく（おごりおごり）HOURAI法律事務所と記された金看板が掲げられている。受付はさながら大手企業の態様で、恐らくは答弁書の何たるかも知らない受付嬢に名前を告げると、御子柴は十六階の応接室に通された。

待つこと十分、ようやく目的の人物が姿を現した。

「いやあ、お待たせしましたねえ」

宝来兼人は営業スマイルを顔に貼りつけてやって来た。どう見てもセールスマンの物腰だが、それにしても目が笑っていないので外回りに出ても笑顔で客を釣ることは難しいだろう。

「つい先日（おととい）に退院されたとか。もう大丈夫なんですか？」